

かなしき左回帰線

大村伸一

1

「よ」は、おどけもので冗談ばかり言う。
だが、初めて「ふ」を見たとき笑いはこわばり、あっという間に手に持っていた国語辞典にすいこまれてしまった。

2

中学を出るなり政治家を目指した「へ」は、どこにあるのかも知らないダムの建築現場で主任をしているが、テントの中のコンピュータの使い方が判らない。
ただ、「へ」はそんなことを少しも気にしているふうはない。

3

父親は工場が5つもある会社の社長だが、高校時代非行をたしなんでいた「や」は、ことのほか博打が好きで、たいてい毎日無一文で生きている。

4

知的できびきびしたものの言い方をする「え」のことを、皆が、きっと、とんとん拍子に出世するものだと思っていたが、やはり女性だからだろうか、いつのまにか課長と仲がよくなって、来月結婚するのだという。

5

普段は、おっとりしていて、どこか抜けているような「う」のことをみんなは安心して見ていられない。あれこれと助けてもらって、なんとかやっていけているように見える。自分でも気付かないうちに他人の好意を利用しているのだと、酒に酔った晩などに思わないでもないのだが、そんなこと翌日になればすっかり忘れてしまう。

6

勿論「わ」の愛人だということは公然の秘密だが、グラマーでちょっと露出狂の「ら」に言い寄るものは多い。ちゃんと避妊はしてるからと、言い訳をするから余計に「わ」は腹を立てる。

7

「さ」や「ち」などといった女性達には評判が悪いのだが、「ゆ」は純情で妙にわかいらしい感じがする。でも恋人ができないのは、ひどいわがままで、すぐに愛想をつかされてしまうからだ。

8

なにを言われても不愉快な顔ひとつしない「お」のことを誰もが足りないんじゃないと噂している。

「け」が面と向かって言ったときも、「お」は表情ひとつ変えなかった。耳が聞こえなかったのである。

9

目の前でばかと言われても「あ」は笑っているだけだ。

「ひ」や「め」などは、あれは猫をかぶっているだけだよというが、「あ」が猫を被ったら単に「猫」になってしまうだけだと、冷静に「つ」は指摘する。

10

「ふ」のことは誰も知らない。

くしゃくしゃの顔で何を考えているのか分からない。

11

「め」はペットを飼うことが好きで、「猫」や「二個」や「不在」が何匹も家にいるが、育てることが好きなわけではない。結局、餌をやったり、散歩に連れていくのは姉の「ぬ」ということになる。

12

戦争のことを語らせたら死ぬまで話をやめないだろうと言われている

「ほ」には、右足がない。ときどき左足がなくなることもあるが、戦争とは悲惨なもので、あまりの悲惨さに、ときどき左足が、亡くなった右足を偲んで右足になってしまうのだと説明する。

勿論、誰も聞いてはいないのだが。

13

「わ」は若くして死んだ。自動車事故だった。

解剖してみると、おおきな乳房の中にやけに小さな脳が隠されていた。どこかの国のスパイだったのかもしれない。

14

「わ」の妹の「ね」は姉の死後も、喫茶「濁点」を一人で切り盛りしている。ちょっとかわいい笑顔を見せるので、勘違いした近所の学生や会社員で、店はたいへん繁盛している。

15

「濁点」によく顔を見せる「せ」は、排気道を5年くらいやっていて、圏の代表になったこともある。学校の成績もよく、生徒会の会計をやっているのだが、計算はあんまり得意じゃないんだとすぐに言い訳をする。

16

二人の不良に囲まれていた「に」は、実は、「せ」が生徒会の予算を使い込んでいるのを知っている。いつもうすら笑いを浮かべているので、みんなは不気味がっている。

17

「し」と「こ」はいつもふたりで「に」の真似をしてからかっている。いじめなのかなと時々自分達も思うことがあるのだが、「に」を見るとついからかいたくなるのだ。しかたないって、と「こ」は見上げる。「し」はこの圏では比べるものがないくらい背が高い。

18

「い」について話を聞こうとすると、誰もが口元を手で隠し、だめだめという身振りをする。「こ」だけが少し話を聞かせてくれるのだが、いわく性格が曲がっているだとか、目つきが悪いだとか、まともな評価はひとつもない。

19

いつも誰かを指差しているので「み」の手首から先にはいつもハンカチがかぶせられている。誰がかぶせるのかは判らないが、にたにた笑いながら指差されると誰もいい気持ちはしない。

20

いつもみんなから距離をとって冷ややかにみているので、「け」のことを誰も相手にしない。だから、「け」が死んでもう3日になるのに、気付いた者はいない。

21

昔、行方不明になったままの「つ」を探しつづけているのだと「し」は言うがどこかに探しに出かけたり、何かをもとめてうろつきまわっている姿を見ることはない。それを指摘すると「し」は、見えるものだけが現実ではないのだと言って携帯テレビの続きを見る。

22

サーカスでは、「ひ」の人気はすごいもので、鉄棒の上を支えなしで飛び回る出し物を見るために、圏内の左端から右端まで遠くから見物が訪れる。これは絶対に口外してはいけないと誰彼に口止めしてから言うのだが、実はこれまで三回落ちたことがあるのだ。結局、落下によって傷つかない体質なのだねと「ひ」はちょっと寂しそうにいう。

23

大会になるとかならず賞をとるので、家の中はトロフィーでいっぱいだが、それは弟の「る」のことだ。兄の「ろ」は弟に比べられても少しも気にしないようだが、まったく運動はできないらしい。

24

こんなところにいたんですかと編集者に声をかけられたことが三度あったので「さ」と「ち」は、並んで歩かなくなってしまった。近所の作家「古」という文字に間違われたのである。

25

一番下の弟の「き」は自分が「さ」とも「ち」とも似ていないので、自分はもらいっ子だという疑いを抱いている。

26

ときどき請われてナイフ投げの的になる「ひ」には、何か言われると肩をすくめる癖があるので、しばしば肩にナイフがささり、それは右側の方が多いため、右肩の方が左肩よりも大きい。

27

近所では、おだやかでやさしい紳士で通っている「も」だが、見かけとほうらはらに殺すことをなんとも思っていない。そのうえ「も」は実は女である。

28

やくざの用心棒である「か」は、元十両の関取だった。背中には油蟬のいれずみもある。

29

「て」には三十文字の乾分がいるが、「な」には目をかけている。いつもこまったような顔をしているので、知らない者はみくびってしまうのだが、本当は策士なのである。

30

いつも偉そうにしている「こ」とはそりのあわない「い」は、実は悪の組織「ん」から圏を守るために日夜戦い続けている。いったいどういう活動をしているのかは判らないのだが。

31

夏休みになると、「る」と「ろ」は「ら」と「ち」の家に遊びに行く。いとこなのである。らとちの父である「を」は門衛で、これまで誰一人門を通したことがないことが自慢だ。

32

初めて宇宙にいったことをやや鼻にかけている「く」は、地表でごちゃごちゃと生きている文字などたいくつでつまらないものだと思っている。おれはこんなところでくすぶってるようなものではないんだと、「へ」に語る。

33

「そ」は圏随一の踊り手である。子供の頃にその踊りを見た「て」はいつか大きくなったら「そ」のような踊り手になりたいと決意した。

34

「の」は捨て子だった。子供ができてから、家族というものは大切なものだといい続けているが、真意は疑わしい。かき氷が好物だと臆面もなく言うからである。

35

田舎者で、センスのかけらもない「た」は、ガラスを憎んでいる。第一、透明なところが卑怯だ、という。第二は、すぐに割れてしまうところだ。だがこの二つもたいした理由ではない。最後の最も重要な問題点は、ガラスがガラスと呼ばれている点だ。こればかりはどうしようもない。

36

「ら」を見るたびに「と」はわきおこる欲望を押さえることができない。「と」は自分の欲望にふくらんだ鼻を隠すために、紙袋を使っている。紙袋には「とりけらとぶす」や「ぷーにゃん」という文字の広告が印刷されている。

37

あじさいの花が好きな「れ」は自分を医者だと思っている。だが、自分が血と精液の区別もつかないことには気付いていない。

38

「か」を殺したのは「む」と「す」の二人組だった。現場を目撃していた「ま」はそう証言した。

39

国訳学者の「り」は秘密組織「ん」のメンバーであり、誰かを誘拐したのだが、それが誰だったのかを忘れている。

-- 登場する文字はすべて虚構であり、現実のいかなる個人や団体とも関係ありません。